

第6回新鋭評論賞

正賞

岩田 奎

百合山羽公の祝祭性

― 稚児とダンサーを

めぐって

百合山羽公の祝祭性

―稚児とダンサー―をめぐって

百合山羽公（一九〇四（明治三七）―一九九一（平成三））が早熟と老成の両方の性を兼ね備えた俳人であるということは、その経歴を見るかぎり論を俟たないであろう。十代のころより投句していた「ホトトギス」の巻頭を四S擡頭時代の一九二九（昭和四）年に飾った一方で、一九七四（昭和四九）年には第三句集『寒雁』で第八回蛇笏賞を受賞している羽公であるが、その割には生前活動した昭和、そしてその大分が死後となる平成を通して顧みられることの少ない作家であった。本稿は、そのような百合山羽公の作品世界と描写手法をつまびらかにしながら、「祝祭性」というキーワードによって、羽公俳句にまつわる諸問題を貫き通す一筋の理論を構築することを企図するものである。

羽公がその頭角をはじめて世に表したのは、「ホトトギス」昭和四年七月号にて以下の五句が巻頭を飾ったときであろう。

この鹿や人なれがほに袋角
むれ鹿にあゆみまぎるゝ鹿の子かな
おしろひの剥げたる稚児も花まつり (※)
花盗人ちりくる花を仰ぎけり
葭切やよしふく風にまぎれざる

(※句集収録時は「おしろい」に訂正)

特に「おしろひの剥げたる稚児も花まつり」は、翌八月号の「雑詠句評会」冒頭で鈴木花蓑と高浜虚子の絶賛にあう。
花蓑の鑑賞は、至極常識的で順当なものであった。

稚児の顔の白粉の剥げてゐるといふ一事を捉へて、花祭の賑かな目出度い気分を象徴的に表はしてゐるのである。普通の人では、一寸見逃しやすいものを、敏感によく捉へ得てゐると思ふ。

ところが、つづく虚子の評は、この句の骨子にもう一步踏み込んだものになっている。

この句は「も」の一字に大変な力があると思ふ。「も」の一字によつて次に花まつりといふけたところが成功した技巧になつてゐると思ふ。精しく言へば、「白粉の剥げたる稚児も花祭りの盛況の一つの場面である」といふ意味であつて、白粉の剥げたる稚児は、尚其他いろ／＼の事があらうが、花祭りの盛んな祭りを、象徴するに足りることであるといふ意味が言外にある。即ち「も」の一字を通して、凡てのことが皆花祭りに流れ込んでゐるやうで、「花祭り」の、終五字が膨れ上つてゐるごとく叙されてゐる。之が「花祭おしろいはげし稚児もあり」と言つたのでは少しも力がない。かゝる「も」の字の斡旋はこの句が初めてだといふのではない。已に従来に例のあることであるが、然しこの句の場合に於て特に一言する所以である。

「も」の一字に焦点を見定め句を解剖してみせた虚子の、「も」の一字を通して、凡てのことが皆花祭りに流れ込んでゐる。「終五字が膨れ上つてゐる」とは言い得て妙な表現であるが、なぜ「かゝる『も』の字の斡旋はこの句が初めてだといふのではない」にも関らず虚子はほかでもないこの句において特別に「も」が効いていると感じたのだろうか。

句の内容に立ち返ってみれば、稚児という、未発達でありかつ男とも女ともつかない両性的な性格を持つものは、たしかにそれらの点において聖めいて、降誕仏と似通う部分があるろう。そこへさらに花祭用の化粧が施されてゐるのだから、ますます仏性を帯びた存在となつて日常性・身体性から異化されてゐる。しかし、この句ではそんな白粉の剥落、つまり仏性の仮面が毀れて中からもとの人間

の子供が露出して、いるという二重の異化を詠んで、いるのである。そこには灌仏会の意味さえよく理解しておらず、大人しくして、いられないために化粧のすぐ剥げ落ちてしまう稚児のかわいらしさなども見えて、いようが、どことなく花祭の催される白昼のシラケ感に相通ずるものがある。そこから気づかされる、宗教行事でありながら世俗の民衆にひらかれた催しの精神的通俗性は、密閉空間でなく屋外で催されるという物理的開放性と調和して、花祭という現象を、仏像を中心にしながらも、淡く広がってゆく不定形のものとして、つよく性格づけている。

これが、虚子のいう「も」の構造の正体ではないだろうか。花祭という季語が、清濁ならぬ聖俗併呑のおおらかさを持った空間であるからこそ、その白昼で展開される雑多な諸事象がひとりの稚児を表象として「花まつり」のなかにあらためて回収されてゆくことに面白みが生ずるのである。「も」の一字を漏斗

にして全事象が花祭りに流入し、下五が膨れ上がっているというのは、花祭の「包摂性」に支えられている部分が大きいのだ。

虚子の解釈によれば、「も」は文法的には添加の役割を果しているといえようが、けだし花蓑はこれを強意の役割と取ったのではないだろうか。白粉が剥けているという感動を強く押し出し、軽い切れを作りながら下五に接続しているという読みである。この読み方も、じつは花祭の包摂性を前提にしている。大きな季語の真只中に瑣事を発見したというのでなければ、発見の感動に意味がないからである。ともあれ、この句における「も」は両方の機能を果しており、ゆえにどちらか一方だけに絞って考えるというのでは不十分であると考えられよう。添加と強意の両ニユアンスを孕んだ「も」は、花祭という季語が諸々の雑事を包摂しうる大きな器であるということに下支えされている。

さて、このような「も」の用法は、とくにへおしろい」句が収録されている第一句集『春園』など初期の羽公俳句にまま見られるものである。

をりをりの主婦の姿も花圃の秋
香煙を恐るゝ妹も厄詣

秋郊に群れ咲く種々の花に紛れている主婦の姿を焦点に、空間の全事象が「花圃の秋」に回収される。幼い妹がご利益のある香煙を怖がるという微笑ましく通俗的な瑣事を、神社の境内を中心に淡く広がる厄詣の空間が包摂する。

また、これらの句になんとも言えない、印象派絵画のような淡い明るさが漂っていることにも注目したい。「稚児」句を含め三句とも、詠まれている内容自体は良いとも悪いともない価値中立的なものだが、どこことなく

よろしい感じが醸し出されている。

このよろしさもまた、「も」の効果によるものと言えはしないだろうか。「も」を受ける語（「花まつり」「花圃の秋」「厄詣」）が指し示す概念に広がりを持ったおおらかな包摂性がなければ、この形式は成立しない。おおらかな空間に「も」を介して流入するからこそ、とくにめでたくもない事象に「それ『も』またよし」といった風情、よろしさが生じているのである。

また、このように中七末尾の「も」を唯一の漏斗として下五に全てが流入する（稚児）式の「も」に限らなければ、羽公の淡い「も」の俳句はその全作句時期を通して枚挙に遑がない。似た構造を持つ句群ごとに並べて詳述する。

綿虫を追ふ子の顔も暮れにけり
狩犬の貌のほとりも昏れかゝる

勿論全天が夕暮を急いでいるのは分つてい
るのだが、そのなかで目の前にある具体物を
じつと見ている。「子の顔／綿虫」「狩犬の
貌／ほとり」という、残照をうつす固形物と
その周囲に曖昧として広がる空気との二段構造
により、夕暮全体に印象の浸潤してゆく補助
線が引かれている。

せせらぎの向うのひとも萩見かな
見下ろせば谷間の宿も鶏合せ
海もやゝ秋に傾く沖膾

せせらぎの此岸でも萩見が、谷の上でも
鶏合が行われており、彼我の間にある水平／
垂直方向の隔たりを超えて包括するものとし
て土地中に萩見／鶏合の雰囲気がたなびく雲
のごとく広がっている。へ海もやゝ句では、
沖合の漁船にいながら遠い陸を望んで、そち
らにもこちらにも秋の近づく気配がそれぞれ

に見えるということだが、「も」の一字が遠近両方の情景を「秋に傾く」世界の中に回収し、力技で一句の中に並存させている。

松かぜも雀のこゑも遅日かな

花びらも降誕仏も夕かげり

かまきりも青鬼灯もうまれけり

文法的に言えばこれらは並列の「も」なのだろうが、単純な並列ではない。遅日／夕翳りというのは言うまでもなく茫漠と広がる時間・空間的事象だが、それがはつきりと意識されたのは第一の具体物（「松かぜ」「花びら」）をまず認識したからではなく、第二の具体物（「雀のこゑ」「降誕仏」）の登場によって第一の具体物との間に広がる茫漠たる空間がうすらかに描き出されたからこそである。かまきりも句では生命の誕生さえもそのたまさかの同時性を以て無関係な二事態を結びつけたことにより、かかる二事態が発

生した野原もしくは村落の気配をうすうすと背景に浮び上らせる。

蠅螂も多く門田のみのりけり

かまきりも少きとしの秋祭

美術館豊年の気もただよへり

苦瓜も真黄に秋をつくしをり

豊年・凶年の空気は、まさしく「年」で捉える季語であるように、時間的・空間的包摂性をつよく帯びている。人間と自然を橋渡しする稲作という営為の出来不出来その年全体を性格づけ、その気分を蠅螂や苦瓜という別の自然物にも美術館という屋内の人事にも浸潤させ、そればかりか代表させる。

寒流として天龍も伏し流る

散黄葉天龍も老い流れゆく

この「も」は「世の習いにもれず」といつ

たような意味もあるだろうか。終生を遠州に
過した羽公は地元の風物を好んで句にしたが、
これらの句もその背景で日本列島の津々浦々
の山間を透徹たる冬川が流れ、黄葉が散り敷
いているような印象を受ける。

バードデー鶉縄始めもありにけり
緑の日緑の雨後も見せにけり

このような「名にし負はば」型の俳句も羽
公に多い。特に愛鳥週間は羽公の好んだ季語
だが、その大半が「千羽憂し愛鳥の日の籠目
鶉」へ「愛鳥の週に最たる鶉鳥立つ」のような、
愛鳥週間に包摂される鳥の種族名を詠み込ん
だものである。愛鳥週間／みどりの日と離れ
た情景を取り合せるのではなく、「も」によ
ってその内部の一点を抜き出してみせたこと
で、名に負う他の鳥や新緑が背景に思われる。

他にも「みちみちも雪崩のあとや櫓日和」

〔繭ごもるかげもうすうす生れけり〕〔うちあへる金輪の独楽も澄みにけり〕〔田植神楽棒をこするも一楽器〕など「も」の効果が発揮された句には事欠かないが、長々と挙げてきた例をまとめるとしよう。

先に挙げた包摂性に加え、ここで「局時性」という新たな性質を見出したい。「も」で包摂されて事象が流入した先の器には、かならず時間的な始まりと終りがあるのだ。花祭にせよ、秋にせよ、継続時間の長短はあれ、もちろん、季語というのはそうした性格を持つものだが、季語以外で「暮れ」「夕かけり」に回収されることはあっても、山や街といった地理的情報あるいは色や形といった類型的把握に回収されることは極めて少ないのである。

時間が限られているということは、言い換えればそこで複数の事象が並存するとすれば共時的な関係に他ならないわけであるから、ある広がりの中で同時に存在しているという

空間的な関係が意識されることとなる。空間的に近さも係累もないため（物理的な近接があれば空間把握の措辞をもって諸事象は記述されるはずである）、複数事象間に茫漠とただよう空間がうっすらと意識されてくるという構造なのである。

さて、背景事象の包摂性と局時性を前提として展開されるこれらの句に淡く漂う「よろしさ」は、すでに包摂性のおおらかさによって説明したが、局時性という観点から考えると、それが時のものの闡ぶりに敏く、終りを愛惜するような歳時記宇宙の基本文法と親和するからではないだろうか。また、花蓑が讃えたような偶然の発見（白粉の剝落）のよろこびもまた、局時性を基にしている。これは物事がたまさかであるということの感動はその発生しうる場がたまゆらであるということにより強化されるといふ確率論的な、あるいは一般的な人情を思えば納得のゆくことだろう。

ここで、包摂性と局時性を背景に立ち現れるこのえも言われぬ俳句的なよるこび・よろしさを「祝祭性」と呼ぶことにする。祝祭性というのは、空間的には作者の着眼点を軸に淡くどこまでもうつすらと広がりうるもので、そのなかに発現するあらゆる事象をおおらかに包摂する一方その始まりと終りの明確に運命づけられた時空間を背景に起る、その種々の瑣事が帯びる性格のことである。

羽公がなぜ「も」を好んだかということについて、その機能と効果をつまびらかにすることによって、「かような効果の現前を愛好する作句意識があったからこそ『も』は多用されたのでなからうか」と逆写像様に解くことはできよう。たとえば、包摂性と局時性による祝祭性を用いて考えると、羽公に行事の句が極めて多いことも説明されてくる。『百合山羽公全句集』の季語別俳句索引によれば、雪月花がそれぞれ一一・一〇・二五句（月は

名月も、花は桜・初花・枝垂桜も算入）に対し、涅槃会一・仏生会一四・端午二二（幟・鯉幟も算入）秋祭一三・盆三三句といった具合であり、文字通りの祝祭性を持った傾向となっている。特に盆は季語が持つ文脈の豊かさもさることながら期間が長く包摂性が高いため好まれたものと思われる（〈梨きりし鋏のそばに盆の笛〉〈青尼の盆の白足袋白鼻緒〉など）。

それでは、羽公俳句の祝祭性を踏まえたいま、彼の作品のうち最も有名と思われる句に向き合ってみたい。

その句とは、「馬酔木」昭和二九年二月号にて発表された、

白鳥のごときダンサー火事を見て

である。

相生垣瓜人と共宰を務めた「海坂」昭和二

五年八月号において羽公は、「年輪——自伝的感想」と題した随筆で次のように記している。

元来私は市井の真中でしかも昔の宿場で生まれ、戦災で田舎住いに移るまで市塵を離れたことがない人間ですから、句風がはじめは派手な艶々しい方向へすすんでいました。又範として愛誦する句も皆明るい色艶の濃いものが多かったのです。それが今日までの生活の変化と世の変遷を体験して、いつのまにか人生観まで変わったかのように、冷たく味の薄い句になってしまったのですが、私にはこれも私自身の人生的な投影といってもよいこと、——重ねていえば大きな自然のゆきうごく方へ随応してゆく心もちの具象であると思っております。

「故園」として詠みつつづけているこの数年を、はやくぬけきって力の充実した句境にかえり立ちたいと念じているのです。

「今日までの生活の変化」とは一九四五（昭和二〇）年の浜松市内空襲により罹災し父の生家中川村（現・浜松市）に疎開したことであるが、第一句集『春園』の時代を「艶々しい方向」へ傾きがちだったもの、それにつづくものとして、一九五六（昭和三一）年に刊行された第二句集の題にもなる「故園」の時代を「大きな自然のゆきうごく方へ随応してゆく心もち」を抱いたものとして位置付けている羽公が、この文章にあるようなことを意識しながら編んだであろう『故園』を読むと、収録されている〈白鳥〉句が非常に浮いて見えてくるのである。

この句にまつわる問題とは、羽公の代表句と目されるにも関わらず、他の句に較べあきらかに都会的・官能的であり、平明かつ枯淡を旨とした羽公の作品群のなかでかなり特異なものに思われるということである。

勿論、ある俳人の作風からして明らかに外

れ値めいた句がその人の意に反してたまたま代表句になってしまふということはそう珍しいことではない。ただ、羽公の場合は、一見する限りこの句と相反するような作句傾向を宣言しつつも、その宣言で言及された題の句集に入れ、さらに『自註現代俳句シリーズ 百合山羽公集』においても自選三〇〇句の中に入れてあるのだから、人口に膾炙したこの句の完成度を客観的であれ主観的であれ評価しているといえよう。

さて、この句に関しては鑑賞者により読みに振れ幅があるということも問題にあげられる。例として、片山由美子と中原道夫の鑑賞、それから羽公自身が『百合山羽公集』で披露した自句自解の三節を並べて引用する。

いかにも現代の都会を感じさせて、ドラマがある。繁華街のどこかで出火したというので、あたりの店からつぎつぎに人が飛び出し

てきた様子がわかる。ステージで踊っていたダンサーも、衣裳の上に何も羽織らず飛び出してきたらしい。「白鳥のごとき」がその姿を余すところなく描いている。派手な化粧のままであることも忘れて心配そうに見守っているのだが、そんな場にあって人目を引くのが哀れである。火事というと真っ先に思い出す句だ。

「白鳥のごとき」という形象化のえも言われぬ味わいは、この作者にしてこの作品ありといえる。その高揚した美意識は止まることを知らない。

進駐軍のいた町の一風俗。火事で赤く染つた夜更の町を空気の違う世界から出てきたような女達が覗く。白鳥のように際立つダンサー。

「馬酔木」当該号の連作では、この句の直

後にある（霜の柿朝の炬燵のうへにあり）に
「富士宮俳句大会にて本郷有左右居一泊」と
前書が付されており、（白鳥）句がその前夜
に詠まれたものである可能性も十分ある。本
郷有左右なる人物の住所は不詳のままだが、
静岡県富士山周辺地域には駒門廠舎など旧陸
軍の施設が点在し、進駐軍は軍内での富士登
山の流行などを背景に多く駐在していたとい
う。少なくとも、書きぶりからして地元浜松
ではないと思われる。

さておき、片山の鑑賞は羽公の自解とそう
相違ないものといつてよいだろう。背景抜き
で読んでいるため、おそらくもう少し大きな
都市の繁華街を想起しているだろうが、衣裳
のまま路上で火事を眺めているという「白鳥
のごとき」という措辞の解釈は羽公のものと
ほぼ同一である。

一方、中原の評は具体的な場面を指示して
いないものの「形象化のえもいわれぬ味わい」
「高揚した美意識」という表現は他の二人と

どこか違う印象を抱かせる。

おそらく、中原のイメージは、ダンサーが路上で見ているのだという羽公・片山の読みを否定するものではないだろう。しかし一方、一瞬前まで場末の稽古場で一心不乱に踊っていたダンサーがふと動きを止めた瞬間に窓に映る近所の火事に気付いたというような読みにも肯うのではないか。中原は、白鳥というものを単なる外見の喩えというよりも、ある種の美の象徴として解釈しているであろう。白い衣裳に身を包みながら火事の煌々とした光を受けて輝く髪膚や瞳を横から見ている、肉体を駆使して美を体現する職業であるダンサーの内部にある根源的で野生的な美質が発現したように感じられたということ、具体的な情景はむしろ大事でないとして、抽象的な次元で評したものと思われる。

羽公・片山の絵画的な解釈と中原の心象的な解釈は並存可能であろう。その上でなぜこ

の句が羽公自身の眼に適ったのかということについて、「祝祭性」の理論に立ち返ってみたい。

火事というのは、勿論祝うべき現象ではないし、祭でもないと思われるかもしれないが、これを包摂性と局時性に解体する。

火事自体はおそらく一棟だけが燃えているようなものであるから、全体をおしつつむ包摂性はないように思われる。しかし、ことに夜火事というのは、遠くからもはつきり見え、近くならなさらありありと感ぜられるものである。そして外に出て眺めていると野次馬が遠くから来てぞくぞくと火事のほうへ走って行ったり、自分もそれについて行ってみたり、翌日の街はその噂でもちきりになりたりするような様子を思えば、昂奮の源泉である火事を核とした包摂性をもって火事を取り巻く都市空間全体がやにわに成立する。消防車のサイレンも聞こえ、その夜を起きている者は誰一人として火事に無関係ではいられない。

ないのである。

また、火事というのはあきらかに局時性の現象である。ある一夜という局時性のなかに立ち現れるさらに局時的な火事の華やぎは、それが一夜限りのものであるがゆえに、ダンサーの生身に白鳥という花Ⅱ「今をかぎり」の生命性を宿すのである。

火事の祝祭性を羽公にしては珍しく過去形で詠んだ句に「山火事も凍てはてにける大裾野」〈山火事のあと太陽も寝れけり〉などもあり、〈大裾野〉句は樹々を包摂しうる山火事をさらに「凍て」が包摂しているのだが、羽公が火事を祝祭的でありうるものとして認めていることには間違いないだろう。

加えて、羽公・片山の具象的な読みを下敷にするならば、ダンサーという語から想起される盛り場という空間についても考えるべきだろう。都市社会学者の吉見俊哉は、『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』において、かの空間を個々人が各々のドラマ

性から逃れ得ない場所と指摘する。

もしもわれわれが空から舞い降りて、路上から都市を観察していくことにしたとするならば、盛り場は、決してたんなる「マス」の場としてではなく、諸々の異なった顔を合わせもち、様々な種類のドラマが生起する「出来事」として現れてこざるを得ないであろう。

このように考えてゆくと、突然変異的に思われた〈白鳥〉句も、羽公が馴染みのない土地の、それも普段題材にする農村とは気配の異なる都市空間の盛り場Ⅱドラマ性から逃れられない場にて起った偶然の出来事に際して、普段の祝祭性への意識ゆえに、その祝祭性を逃さずうまく句にした産物だと言えるのだ。むしろ、農村の土着的・自然依拠的な祝祭性とは異なる都市的な祝祭性を前にしてもこのような句を残しえたことこそが、俳人・百合山羽公がたぐいまれな祝祭性の作家であっ

たことの証左ではないだろうか。

※引用の句・文のうち原文に旧字・重字の用いられているものについて、旧字は新字に変換したが、重字はママで引用した。

参考文献..

百合山羽公『百合山羽公全句集』、角川書店、二〇〇六

「ホトトギス」、ほととぎす社、昭和四年七月号・八月号

「馬酔木」、馬酔木発行所、昭和二九年二月号

百合山羽公『有玉閑語』、角川書店、一九九〇年（一九八頁）

『現代俳句大事典』普及版、三省堂、二〇〇八年、（五八九頁）

片山由美子「火の歳時記」第一四回「火事」、飯塚書店、二〇〇八（最終閲覧：二〇一九年八月三〇日）

<http://www.izbooks.co.jp/hinoB49.html>

吉見俊哉『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』、弘文堂、一九八七（九六・九七頁）